

家庭

「私も撮ってよ」
 Ⅱ エルサルバドルで



4度目のエルサルバドル訪問は、99年の3月だった。内戦に終止符を打って7年。もはや中米の小国に、東西冷戦の影は残っていない。

おんぼろバスで首都郊外のネハバ市を目指す。そこで出会ったのが、案内役をかって出た14歳のホルへ。いつもニコニコしているだけで、こちらから話しかけるまで、めったに口を開かない。でも、そばにいる女の子たちには、「お前も写してもらったら」などと話しかけている。

ごみを必死でかき分けている人々とらえようと、カメラのファインダーをのぞき続ける。レンズの片隅に、こちらを向いているホルへが入った。「クイダード！（注意し

地球
を
たがやす

友だちとは離れたくない

宇田 有三

て)」。大声が飛ぶ。すぐそこにトラックが迫っていた。撮影に夢中で気づかなかった。ちゃんと、見張ってくれているんだ。

「ほら、これだけ集めたよ」

中天の太陽を背に彼は、自慢げに袋を持ち上げた。笑みいっぱい顔を大粒の汗が流れ落ちる。

「何が入ってるの」

「まだ使えそうな機械の部品や瓶を集めてメルカード(市場)に持って行くんだ。ところで、そのカメラ、いくらぐらいするの?」

「2千ドルくらいかな」

「そんなに! ほくらの稼ぎは、1日働いても20コロン(約180円)だから、想像がつかないな。メルカードの食堂でおなかをいっぱいにしたら、もう残らないよ」

「学校には行かないの」

「行きたいけど、お金がないからなあ。もっといっぱい働いて、お金をためて学校に行くんだ。でも、ここには仲良しの友だちがいるから、そうになったら困るなあ」

ホルへとの会話は、そんな風に続く。(フォトジャーナリスト)